



Title	ミケーレ・レ・ルッキ：日伊ジョイント・デザイン・フォーラム
Author(s)	柴田, 潤; 富田, 喜一郎
Citation	デザイン理論. 1986, 25, p. 79-96
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52561">https://doi.org/10.18910/52561</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ミケーレ・デ・ルッキ

——日伊ジョイント・デザイン・フォーラム——レポート

柴 田 潤・富 田 喜一郎

## 講演会企画のアプローチ

インテリアデザインを通じ、現在進行形のもの造りの本質を探究しながら、次代に向かって何が準備出来るのだろうかと言った事が、日頃我々インテリア研究室の議論の焦点である。

デザインとは何か、インテリアとは何か、を常に問い合わせ事が重要であり、その問い合わせ自体が一つの答えではないかと考え、デザイン教育の現場に反映させようと努力している。

その問い合わせをデザイン現場で実践した人々がいる。ミラノを中心に輪を広げたメンフィスグループがそれである。メンフィスグループは国際的運動体とし位置付けられ現在も幅広い活躍をしている。

彼等の活動がポストモダンの概念と実践を形成したと言って過言ではない。

メンフィスと過去のデザインムーブメントとの大きな違いは、地域的、協会的、徒弟制的、企業的、あらゆる既成的運動体ではなく、国際的で自由で楽しいグループに育った事である。

この大きな発想の違いが、造形面に色彩面に表現されてくるのは当然であり、流通、情報活動にも大きな影響を持たらしたと言える。

昨年（1985）京都国立近代美術館の“現代デザインの展望—ポストモダンの地平から—展”は大変興味深くエキサイティングなイベントだった。学生達に取っても、何かが感じられた、貴重な時間であった。彼等のレポートからそれが伺えた。

1986年度のカリキュラムを作成するに当たり、我々研究室は何か新しい切り口を探していた。良い人材を確保する事が大事だった。そんな時期に富田喜一郎氏を講師に迎えた。

富田氏はイタリアで5年仕事をした後今に至る3年間京都でスタジオを開設し興味ある建築を設計していた。富田氏がイタリアのデザイナーの講演会を催して若い人達に活気を与えたといいだし、我々もそれに賛同し是非やってみようと言う事になった。

そんな折、雑誌“F. P”（学研）がミケーレ・デ・ルッキに基調講演を依頼し“ザ・デザインビジネス サクセスへの扉”というセミナーを企画していた。

“第3世代の旗手ミケーレ・デ・ルッキ”と言う派手なキャッチフレーズで登場して来た彼の作品は、イカルス（ポストモダン出品）で知ってはいたが其の他の作品については余り知らなかった。

後に知る事になるのだが、彼の作品はドムス、カサボーグ、etc.でよく見ていたのだが、その時点では名前とは結び付かなかった。雑誌“F. P”の記事と彼の写真を見て良いイメージだったので、メンフィスに至る経過から現在そして未来について語ってもらえば、興味深い講演会になるだろうと確信した。

京都へ来訪の折の講演を富田氏よりF. Pを通じミケーレ氏に依頼した。

タイトルも“イタリアン・デザイン・スピリット”と富田氏の発案で決定し5月31日に開催する事が4月18日に決定された。それから講演内容、プログラム、印刷、会場、シナリオ作成、協賛、後援、住所録、宛名書き、看板、道路誘導、学生作品ディスプレイ、駐車場、ビデオ撮影、ETC.

一般公開講演会を始めて催すので、大きい事も、小さい事も気になる事ばかりだった。

以上が今回の日伊ジョイント・デザイン・フォーラム、イタリアン・デザイン・スピリットのアプローチである。

## モダニズムからポストモダンについて

モダニズムは、新しいメカニック、新しい素材、新しい技術、それらから生まれる新しい考え方で生活に潤いを持たすべく前進して来た。その事自体は現在の繁栄につながる重要な要素であった。が同時に地球上に多くのアンバランスが出現し始める原因ともなった。

民族、宗教、政治、経済、それら諸問題が情報技術の変化により過去の世界より正確でスピーディに伝達される様になった。

その為にアンバランスを生みだしながらも、それらを是正していく作用をモダニズムは充分に備えて始めていた。モダニズムは完全主義を目指している様だった。モダニズムは人間の自由すら美しい箱の中に閉じ込める事で満足しようとしている様に思えた。

自由は存在するものであるという概念（既成概念）が定着し始めた為、モダニズムには自由を解放していく力が欠如し始めた。新たに自由を獲得するべく行動しようとする概

念が必要とされる時代が来た。

デザインの動向もデンマーク、フィンランド、スエーデン等、北の時代からイタリア、スペイン、フランス等、南の時代へと移行して来た。

以上の要素がポストモダンの概念を構築するエネルギーとなった。

1960年代、1970年代、1980年代と10年区切りに以上の事柄があてはまつた。

歴史の流れのフォーメーションから予想すると1990年代は日本、アジア、アフリカの時代となるはずである。そして1950年から2000年までを総合したインターナショナルな時代となるであろう。

以上が筆者の時の流れに対する考え方である。ポストモダンを解釈するのに日本語では脱近代、次近代、変近代、開近代、古近代、再近代、複近代、色々言葉があてはまる。モダン自体も近代、合理、機能、簡易、便利、色々のニュアンスをもっている。

こんな事を考えながら、“第3世代の旗手ミケーレの活動”を日本のクリエーターに伝えたいと考えた。

講演会プログラムはFP企画編集の池亀拓夫氏と建築家の富田喜一郎氏が作成した。

1. 鬼才ミケーレ・デ・ルッキの世界（スライドショー）
2. 基調講演：ヒューマンデザインの創造のために ミケーレ・デ・ルッキ
3. 座談会：80年代後半のイタリアンデザインの展望

ゲスト ミケーレ・デ・ルッキ

富田喜一郎 池亀拓夫

と決定し、嵯峨美インテリア研究室が全面的にサポートする事になった。

5月31日 開会挨拶 講師紹介とプログラムどうりスムーズに進行した。

### スライド＆コメント（鬼才ミケーレ・デ・ルッキ）

ミケーレは彼自身とその周辺の活動と現在に至る動向をスライド160枚で判り易く解説してくれた。（スライドを通じ彼の解説で進行、本レポートでは写真がない物に関しては名前とオブジェ名に留めた。オブジェ名は説明のため筆者が勝手に付けた。特筆すべきコメントは進行順に単文で記しておく。スライド映写したものは☆印を頭に付けた）

1968年のミラノトリエンナーレのイベントから彼の活動が始まる。

ナポレオンのコスチュウムでドムスの表紙を飾ったのが私のデビューであるとミケーレは誇らしく語った。

ミケーレ：1968～'78年の10年間は“建築におけるラジカルデザイン”的だった。ラジカルデザインとは実際のプロジェクトではなくプロジェクト自体のアイディアを探す事

だった。(このラジカルデザインにはあらゆるジャンルのアーチストが参加していた様だ。)

☆ “芸術と平行移動する建築”

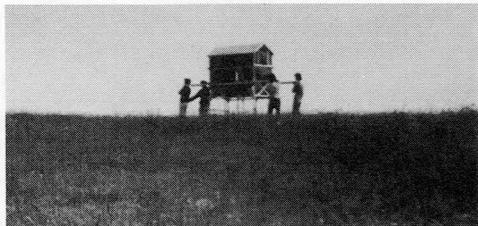
☆ “一つの建築的オブジェと呼ばれる作品を一つの丘まで運ぶ事”

☆ “国鉄の線路上におけるイベント”

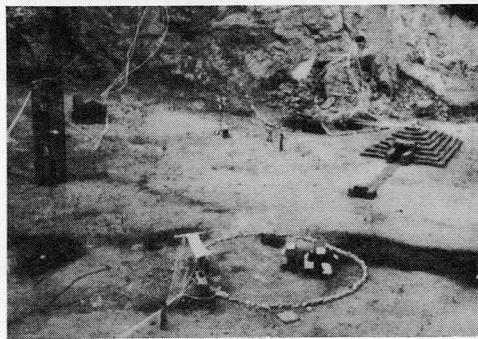
☆ “1メータの高さでいつも住まねばならない男” (NO. 1)

☆ “山合いの一週間のセミナー” (NO. 2)

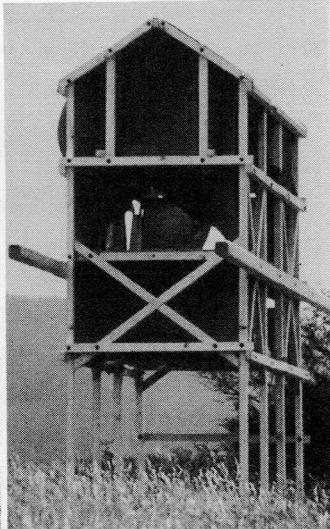
☆ “一人の男が4人の友人の中で支えられている” (NO. 3) (住居に必要な全ての要素を入れた)



No.1



No.2



No.3

ミケーレ：以上の様なテーマでミーティングやオブジェ造りやパフォーマンスをしていた。

これらの事は人々に直接判ってもらえる行為ではなかった。10年間プロジェクトをプロジェクトしていたと言える。

この10年間のコンセプトワークの後1978年に、アレサンドロ・メンディーニ等とアルキニアを結成し人々に判ってもらえる行為へ転換していった。“オブジェを通して人と対話してゆく”と言う新しい概念を打ち出した。

例えば“機能にとらわれず別のインフォメイションを持った照明”とか“リデザイン”とかメンディーニは新しい言葉を探していた。古い言葉、普通の言葉に新しい価値感を与えた様としていた。

メンディーニとのコラヴォレーション（共同制作）による

☆シレリカ（塔）をたどってゆくランプ

☆針山を持ったランプ

☆関節手鏡を共有するランプ

アレサンドロメンディーニ

☆バシーレという椅子（デザインはマルセルブロイヤー）の座と背と肘に新しいデコレーションを付加した椅子

トリックス アウズマン

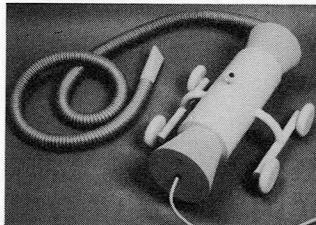
☆パルテノンの柱状の引き出し

エットーレ ソットサス

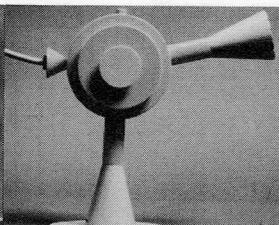
☆ゆらゆら4本脚を支える4個のシリンダーにも又支えられる透明のトップを持った小卓子

ミケーレ：1978～79年にかけ“グラフィックにおける新しい言葉”というコンセプトで家電製品をデザインした。それは技術を感じさせないで機能する事は意識してシンボリックなオブジェとしてまとめた。これらは特にピンクとブルーとイエローのコンビネーションが注目された。

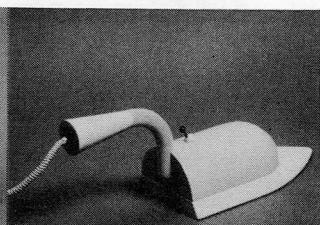
☆温風機 ☆ガスライター ☆ミキサー ☆蚊取器 ☆コーヒーミル ☆掃除機（NO.4） ☆ドライヤー（NO.5） ☆アイロン（NO.6） ☆湯沸かし（NO.7） ☆扇風機（NO.8） ☆トースター（NO.9）



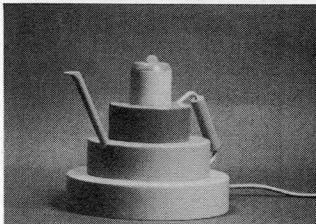
No.4



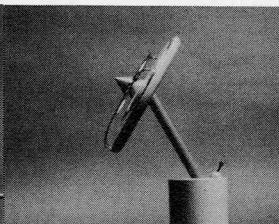
No.5



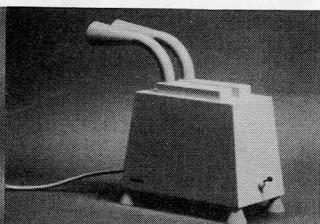
No.6



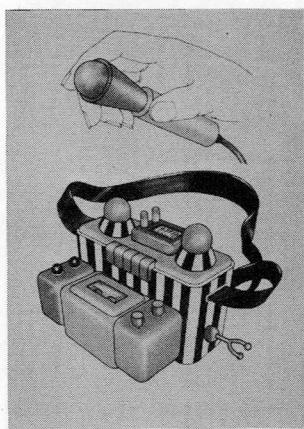
No.7



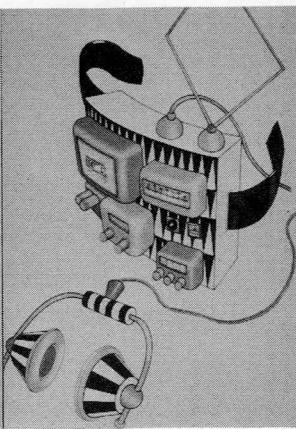
No.8



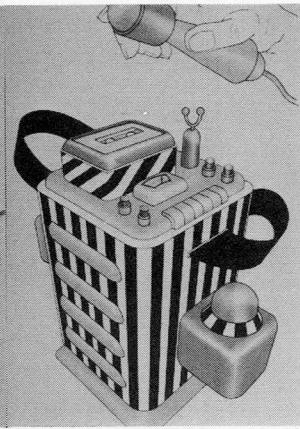
No.9



No.10



No.11



No.12

機能を持ちながら機能を感じさせないデザインを追求する為の

☆オーディオシステムのコンセプトドローイング (NO.10 NO.12)

ミケーレ：建築家は家の中で自分が使う全ての物をカタログ（自分で造る）化して持っている必要がある。

メンフィスは1978年に設立され現在も活動している。メンフィスの説明は難しい。会社でも企業でも建築スタジオでもないし、スタイルを持っているのでもない。

メンフィスの動き自体にメンフィスがある。毎年新しい仲間が来て新しい事をやっていく国際的グループである。

メンフィスグループのメンバーの作品をスライドで紹介する。

ピーター シャイヤー 形に対しての自由さを持っている。彼はティーポットのデザインで有名であるが今ではティーポットに見えないティーポットをデザインしている。

☆ティーポット (NO.13) ☆ソファー ☆テーブル

かわいいテーブル

アンドレア ブランジ

☆長椅子的ソファー 逆円錐状ソースポット

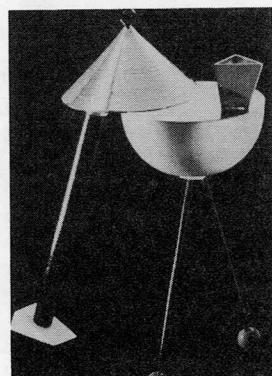
ジャンニテエイル ボリューム感に対して鋭い感性を持っている

☆2本のパイプによるランプ

磯崎 新

☆おひなさま型収納箱

ミケーレ：メンフィスをやって良かった事は多くの人からこんな



No.13

ムーブメントが欲しかったと言って喜ばれた事だ。

マルチネ ベティン

☆半円状ランプ ☆モビール的ランプ ☆椅子

ナタリエ パリキエ 形はシンプルでその色と模様におもしろさがある。

☆ソファ ☆テーブルウエアー (NO.14)

マイケル グレーブス メンフィスのメンバーでアメリカのポストモダン建築における重要な唯一の建築家。彼にとってはメンフィスとポストモダンは別々の事であり、ポストモダンは古いスタイルや古い材料を使う行為だと解釈している。

この様にメンフィスはデザインにおける全ての新しい活動を認めている。

☆ベッド

ジョルト サーデン 形はシンプルでその色と模様におもしろさがある。

☆椅子 ☆ワードローブ

倉俣 史朗

☆円形テラゾウテーブル

エットーレ ソットサス 全ての技術をどう使うかがテーマ

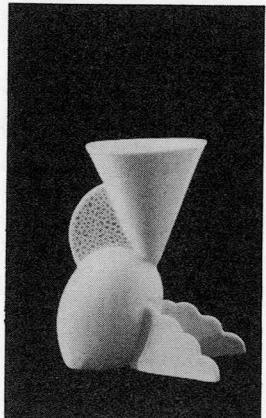
☆斜め線を境に2つのイメージを共有する本棚 (NO.15)

☆小物を置く為の普通ではないテーブル ☆ムラノ社のベネ

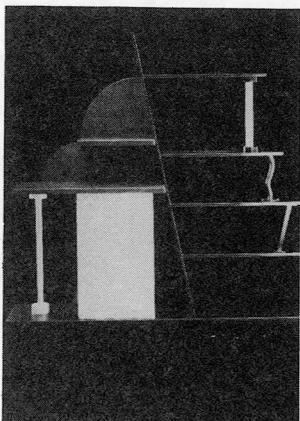
チアガラスによる皿 (NO.16) ☆メタルによるギザギザ

パイプの果物入れ (NO.17)

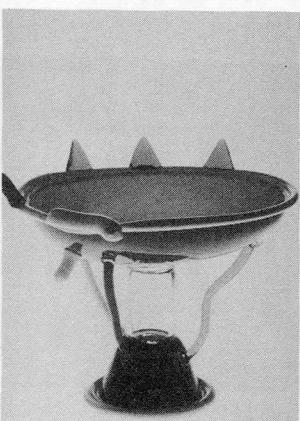
☆セラミックによるランプ



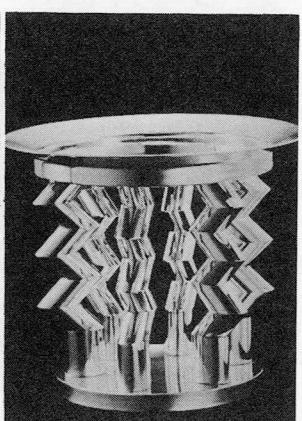
No.14



No.15



-85-



No.17

アルト チビチ

☆デスク

ミケーレ：メンフィスでは年間50～60の商品を発表している。ファッションの様に現代的である。今まで約300個の商品が作りだされそのほとんどがアメリカの美術館に収蔵されている。それらは次の段階で使いたい。メンフィスの商品は全て受注で1品制作で値段は高い。

ミケーレの最近の作品

☆大きな模様のラミネート板トップのテーブル ☆3人一諸に吹かないと制作出来ない

ガラスの花瓶

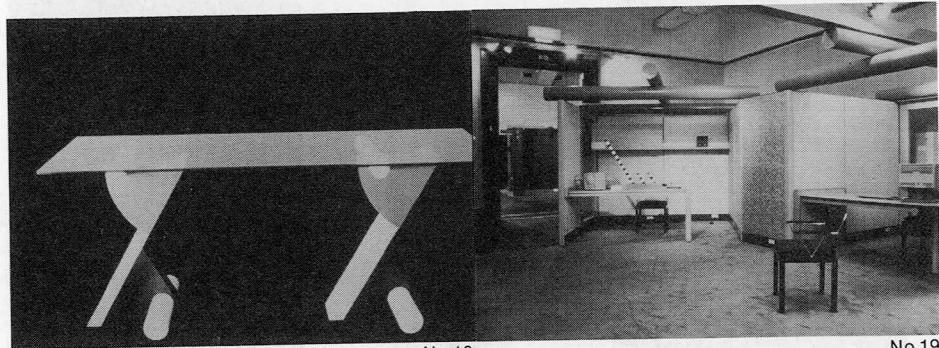
☆ブルーと白のテーブル (NO.18) ☆円と球をモチーフした椅子

ミケーレ：メンフィスはメンフィスの為に又文化の為にだけデザインをしている訳ではない。オリベッティーをクライアントとしたオフィスシステムの提案と製品のデザインをしている。

☆イカルス オフィスオートメーションと言うアメリカ生まれのコンセプトをどの様にヨーロッパナイズするかがテーマだった。配線システムをサイドパネル（配線収納庫）に内装した。イカロスでメンフィスの実験オフィスをデザインした (NO.19)  
玄関、応接、会議、休息、スタジオ、オフィス、中庭的空間これら小さい建築をアッセンブリーした。

☆デルフォス 基本システムはメインデスクとサイドデスクと脚のバリエーションから構成されている。サブシステムに何種類かのパーツがあり、それ等の組み合わせで多くのコンポーネントが得られる (NO.20 NO.21)

コンセプトスケッチ 色々な環境にセットしてどんなイメージになるか (NO.22  
NO.23)



No.18

No.19

ミケーレ：多くのオブジェをデザインしたがその中には照明器具も多い。大理石のデザインも好きでオリベッティのデザインに疲れた時は大理石のアトリエで気分転換をしている。

☆灯部のディスクがチェンジ出来る照明スタンド ☆

　ウォールブラケット ☆アッパーライトスタンド

☆円と球をモチーフにしたブラケットとペンダント

☆竹を支柱のモチーフとしたスタンド

☆アームをゴムで支えるデスクスタンド ☆象の足の様な脚のテーブル

☆造るのに20日かかった大理石の宝石箱 (NO.24)

☆大理石の花瓶

☆引き出しばかり作っていた木製パネルの会社のために脚を円板にしたかわいいテーブル ☆脚の移動により変化するガラストップのテーブル ☆コンピューターワークの為の椅子 ☆ソファー

☆キッチンシステムのデザイン (ミラノの近くのベルガモ)

ポストモダンのイメージ トライディショナルなイメージ

若い人の為のイメージ

☆ファッションメーカーのフィオロッジの64の店舗に對してのウインドウのシステムディスプレー ☆エアコンと照明のコンポーネント化

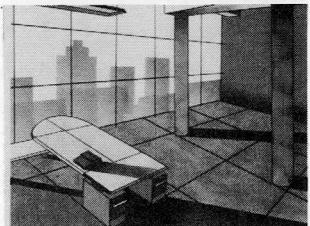
☆バカンスのための家 (モービルハウス) スイスの山小屋のイメージ 丸太のイメージをブルーのパイプとしそのパイプの中にエネルギーとインフォメーションを内装 一ヶ月生活可能 家の外に向かってテレビ、照明を設置、壁には暖炉も設置



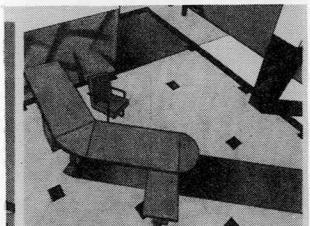
No.20



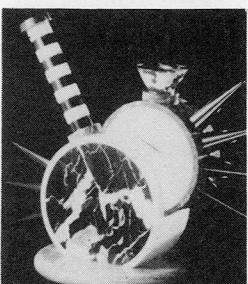
No.21



No.22



No.23



No.24

以上160枚のスライドが富田氏の通訳で語られた。10分の休憩の後基調講演へと進行した。

基調講演：ヒューマンデザインの創造のために 通訳：

富田喜一郎

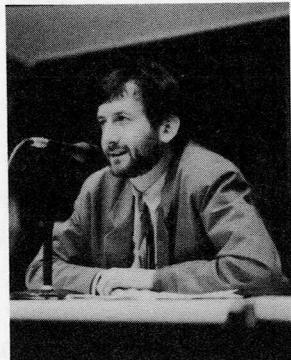
MICHELE DE LUCCHI 基調講演訳

私はラディカルデザインの提案を通して、その時期、ラディカルデザインの目的が何であるかをどのように説明することが出来るかを考えていました。それはデザイナーとか建築家の創造性を刺激することでした。そして又、一般の人々の創造性についても同じです。何故ならば、建築家とかデザイナーがクリエイティブであることは当然ですが、そうでない一般の人々も又クリエイティブであることが出来るからです。それは商品や空間そして建築物をクリエイティブな方法で使うことが出来るからです。

我々はラディカルデザインの色々な行為を通してこの事を提案してきました。その他にも、この時期、一般的に用いられる彫刻の道具とか絵を書く為の道具を一切使わないで行なう、アーティストが存在し、コンセプチュアルアートと呼ばれていました。これはこの時期の世界的な現象でもあり、形を表現すること止め、色を使うことを止め、コンセプトにより表現しようとしてきました。そして伝統的な芸術手法を繰り返そうとは決してしませんでした。

しかしながらよくあることですが、その10年後、1978年には、再び総てが変わりました。画家は再び絵を書き始め、彫刻家は彫刻を作り、建築家は建物を創り、デザイナーは物をデザインすることを始めました。

しかしながらイタリアでの状況は、他の国とは少し異なりました。それは、イタリアでデザイナーとは総て建築家なのです。そして、一人の学生でさえデザインを志す人は建築を専攻するのです。尚、その他にも私の様に何をやるかを決めて決意しない人もいます。私は一般的にはデザイナーと考えられ、言われておりますが、私自身は、デザインをすることを選択した訳ではありません。ただこれまでの私の人生の中で行なった数多くの選択の結果としてのみデザイナーであったので、決してデザイナーになりたくて決意してやっているではありません。多分時代背景が私にデザイナーをやらせているのだと思います。建築物を通してではなく工業デザインを通して何かをミニケーションすることの方が今日においては簡単だからです。工業デザインの方がより速く、そして商品は短い時間に消費され、すぐに古くなってしまいます。ですから、より速くやらなければなりません。イタリアにおける建築物の状況は日本とは異なります。建築物、例えばイタリアで一戸の住



宅を建てますと、それは少なくとも200年ぐらいは使われます。ですから、建築とはとても流れのゆっくりとした行為です。

私はより早いこと、そして、より現代的なことをしたかったのです。そしてイタリアでもう一つ日本と異なる点として、デザイナーは企業の中にはいないことで自由な立場で仕事をしていることです。総てのデザイナーは自分のスタジオを持ち、異なる企業の為にデザインをしています。これはイタリアの企業家達はデザインと言うものが企業の外で生まれることを確信しているからです。デザインと言うものは、少しは企業の中で作られることがあります、企業の外で発展させられることの方が多いのです。これは我々に取って仕事をして行く上に大変自由を与えてくれる大切な状況だと思います。この状況下にいるからこそ私は、メンフィスの仕事をしたり、オリベッティの仕事をすることが出来るのです。

私の実生活は、現実のプロとしての仕事と研究とにはっきり分かれています。そして私は現実のプロとしての仕事なしに研究だけが存在出来たり、又その逆に、研究なしに現実の仕事があり得るとも思いません。それは研究と言うものが、何らかのヒントを与えてくれ、それは何かを現実化する為の引き金にもなりえます。私の職業における研究とは、今日ではラディカルデザインを行なっていた頃のものとそれ程変ってはいません。つまりそれは創造性を刺激することなのですが、ラディカルデザインをやっていた時の様にコンセプトを使って行なうのではなく、工業製品を使って行なっています。ですから、メンフィスの作品とか今ごらんに入れた作品は、それぞれ刺激的なもので、何らかのショックを与えるものであったと思います。

私は、今日において商品をデザインすることは大変重要な行為であると思います。そして私は企業と言うものの存在を信じる一人です。我々の作っていた商品は御覧いただいた様に冗談の様なものが多く、商業性にも乏しいものですが、私自身は、企業の存在を確信しております。そして又企業に取って代るものがない事です。今日においては何ごとにおいても代用品を見つけることはそれ程難かしい事ではないのですが、企業と言うものに取って代ることの出来るものは見当りません。そして企業が機能する為には、商品を生産し、販売し、宣伝し、そして供給を続けなければなりません。この様な意味で企業とは最良のコミュニケーションの為のメディアであり、又最良のコミュニケーションの為の道具でもあります。そして又現在と言う時代もコミュニケーションする為にとかよりアバンギャルドな事をするのに企業を使うのが適しています。

過去においてアバンギャルドな行為とは、絵画とか彫刻、そして建築によって行なわれて来ました。しかし今日においては、それは、よりアバンギャルドなアバンギャルドを行

なうことが出来るデザインの分野あります。今日、工業デザインをすることは、より可能性の高い未来を予測し、より進歩的な見解を持つことでもあります。これらの理由により私は現在デザインをやっています。そしてよりアバンギャルドなデザインをしたく思っています。

私は消費主義と言うものを信じています。そして、物を消費すると言う行為は正しい行為であると思います。

過去において、特にヨーロッパにおいてですが、消費主義を悪く言い、消費主義とは悪いであり、消費主義とは不幸な未来をもたらす、慎まなければならない行為であると言われていました。しかしながら現在多くの人々は、消費主義は常に存在するだろうことと、消費主義に取って代るものがないことを信じています。それは丁度企業に取って代るものがない様に消費主義に取って代ることの出来るものがないのです。であるならば、この消費主義と言うものを我々は利用しなければなりません。それは消費主義と言う行為に価値を与えることでもあり、物を消費することに価値を与え、又人生に価値を与えることでもあります。全てを消費してしまうこと、それは大変美しい事です。決して悪い行為ではありません。しかし今日においても消費主義を阻止しようとする多くの企てがあります。例えばアメリカの宗教グループとか、インドの宗教グループ、それにヒッピーもいました。彼らは皆、消費主義のない世界を夢見ていました。しかし彼らの行為は失敗しました。そこで私はこの消費主義と言うものに価値を与えることが出来れば何らかの突破口があるのでと考えました。ここで消費主義に価値を与えると言うことは、工業製品を通してコミュニケーションすることだと言えるでしょう。工業製品とはただ単にその機能によって、使われている物だけではないのです。それはコミュニケーションする為にも使われているのです、この概念を判っていただく例として、例えば椅子ですが、椅子は人が気持ち良く座わることの出来る様に考えられ、又その様に機能するものでなければなりません。総てのデザイナーや建築家は、良い椅子をデザインする為には気持ち良く座わっていれるものでなければならぬことを知っています。しかし椅子はただ座わる為だけにあるのではありません。例えば今、私の目の前には、この様に多くの人々が椅子に腰を掛けでおられます。そしてその他にも多くの椅子があります。又これらの椅子は人の座わっていない時間の方が、座わっている時間よりも遙かに長いのです。又この会場にはだれも座っていない椅子もあります。これらの椅子は座わる為に存在している椅子ではないのです。何かをコミュニケーションする為に使われているのです。これで御判りいただけると思いますが、今日のデザインにおけるテーマはこの商品の付加価値とか、メッセージと言ったものにいかに対応していくかであります。

イタリアでは、メンフィスが話題になった後、多くの企業が私に商品のデザインを依頼して来ますが、それは一般的な機能よりも企業イメージと言った点で機能する商品デザインを求めて来ます。メンフィスは世界中で有名になりましたが、1ページの広告をした訳でもありませんし、広告と言うものに一円の出費もしておりません。しかしそこには、常に商品がありました。そして商品は常に広告することに匹敵するだけのコミュニケーション的な価値を持っていました。この様にして、企業は私に、広告することに匹敵するだけの明解な企業イメージを持った商品のデザインを依頼して来ます。これは企業に取って、大変有益で興味深い蓄財の方法でもあります。企業は一般的に商品を生産することは良く知っておりますが、生産しますのに研究をし、完成しそして広告すると言うプロセスでしかありません。私の現在のゴールであり、目標は、機能すること、良く売れる事、そして市場において大変話題になることは当然ですが、より高次元なコミュニケーションを持った商品を開発することです。又この事がきっと未来において何かをなしうる、デザインを探し得るテーマであると思います。それは住まいの中のデザインであると思います。それは住まいのインテリアと言うものが、世界中がそうなのですが、まだ大変伝統的なものです。そして、現在大きな力で代ろうとしています。何故ならもっといいイメージで変革されてもいいと思うからです。そして又このことはイタリアンデザインが話題を持っていた原因でもあります。住宅のインテリアデザインはよりアバンギャルドな、コミュニケーションの道具であり得ます。それは月面に着陸したロケットが、アバンギャルドな技術のコミュニケーションであった様に、私は小さな住まいの中の商品をデザインしながらも、例えばホークとかコップといった小さな物をデザインすることによっても大きな変化を起こすことが出来ると思います。何故なら、小さな商品をデザインすることを続けることによって、個性とかその人の装いなどに少しずつ変化を与えることが出来るからです。

この事を最後に説明して終りにしたいと思うのですが、私に取って建築家とかデザイナーの仕事と言うものは、こうでなければいけないと考えます。それぞれのデザイナーそして建築家は、自分自身の象形言語を、そして自分自身の象形形態を創造する為に活動しなければならないことです。何故なら、言葉のないコミュニケーションはありえないからです。

又、一人々々の建築家が、まったくオリジナルで、個性的な言語を持つことが大変重要であると思います。それはものの形を通してコミュニケーションする為と比較をする為に大変重要なのです。

冨田：それでは引き続き座談会に入ります。池亀さん、雑誌“F.P”とデザインビジネスという概念が1年経過して、そしてミケーレを迎えた感想を聞かせて下さい。

池亀：イタリアでのラジカルデザインの持つ文化的側面と現在のオリベッティ社に見られるオフィスファニチャーの様なデザインの実践的側面の両方を持ってるミケーレはすごいです。今彼は彼がデザインしたメンフィスのネクタイをしていますが一本のネクタイも、家具も、O.A.の様なビジネスの世界もこだわりなくやってしまうし又メンフィスのアクションは広告費を使わず全世界に影響を与えました。その辺りが今の時代に受けたのではないかと思っています。

デザインビジネスと言うのはデザインの本質的機能をもう一度確認しようと言う事です。デザインがアートであるとかカルチャー的一部としてギャラリーで展覧会をする様な認識をされているのであえてデザインの後にビジネスを付け新しいコンセプトを打ち出したつもりです。

去年の創刊の為のイベントではルイジコラーニのイベントを紀の国屋でした。現在F.Pは日本の企業のデザインについて特集しています。日本の企業でもミケーレの発表した扇風機とか蚊取り器と同じ様なアクションが企業内でも展開されています。

企業イメージがC.I.戦略にとどまらず一個の商品のデザインその物が問われる様になって来ています。

技術の時代から商品のアイデンティティーが問われる時が来ました。

そこでミケーレに聞きたいのですがスライドにあった蚊取器とか扇風機とかアイロンの様なおもしろいデザイン展開とオリベッティの様に技術、経済その他複雑な要素を持った仕事がなぜ両立出来るのかその秘訣を知りたいです。

ミケーレ：ソットサスもそんな質問をよくします。それに対して私は、貴方は夜会服も仕事着も持っているだろうと言います。

プロジェクトする前に精神的刺戟を課してからプロジェクトに入っていきます。普通、デザイナーはオーダーがあって始めて仕事となります。だからジョークの様なデザインは出来ないです。

私はオーダー以前に精神的刺戟が大事であると考えます。そして将来を見るとい



う行為が大切であると思います。

ビジュアルな物も今あるビジュアルは使いません。

この様な刺戟をエキサイティングな状況で持ち続ける事が大事です。

デザインは企業の中からは生まれません。日々の生活の中から生まれるのです。

リアリティーのない虚構からは生まれません。

デザインはその時代の鏡だと思います。道具はその時代を映します。今日我々1980年代の元には1950～60年代の道具が帰って来ています。それぞれの時代にそれぞれのイメージがデザインを通して出て来ます。今日におけるデザインの命題は現在のイメージをつかむ事です。デザインされた物はその時代を反映した行為だといえます。

池亀：富田さんはイタリアンデザインとかポストモダンについてはどうの様に考えておられていますか。

富田：アルキミアが出て来た1977～1980年に丁度イタリアで仕事をしていました。へんてこりんな活動をやっているなあと内容を知らずに思っていました。メンディーニ氏も以前勤めていたスタジオによく来ました。知らないうちにポストモダンの渦にまきこまれていました。

イタリアにいた時はポストモダンの重要性はそれ程感じませんでしたが日本に帰って日本の建築界はなんと自分を自己規制しているのかと思いました。例えばメンディーニ氏のアドバイスによりドムスの社屋ビルのファサードと後ろを完全に違うイメージしてみようという提案なんかをしましたが、それとは逆発想の近代建築の疑問を日本に戻って感じました。思考形態に自由を与えるという活動の重要さを日本に帰ってから気付きました。ポストモダンの活動は生まれるべくして生まれた活動だと思います。

デザイナー自身が既成概念をどう打ち破るかの重要さを日々のおもしろさから見つけたと思います。作る側の楽しさがポストモダンの自由さの中にあるのを発見したのです。

池亀：自由さといった事から個性の表現につながるのですが、先日ミケーレの仕事上のパートナーであるマルチネベティンと倉俣氏とミケーレとで将来のオフィスはどうなるのだろうというテーマで議論しました。マルチネはオフィスこそ個性の表現の場だからユニフォームなんかはなくなり裸で仕事をする様になるという極論でみんなを煙に巻きました。

そこでミケーレにワーキングスペースについて話してもらいたいのですが。

ミケーレ：オリベッティーのデザインを通し多くの事を学びました。1981年アメリカ、カナダ、ヨーロッパのオフィスを見て回りました。将来どうあるべきかを考えました。O.A.がオフィスイメージを変えてしましました。配線とか機械がオフィスをメカニックにしつつありました。仕事のスペースが小さくなつて来ているのが現状です。現在はインテリアデザインとしてはおもしろくない空間です。しかし将来的にはオフィス空間は美的価値を持つでしょう。従業員自体が自分の空間をデザインするかもしれません。仕事場こそ個性の表現の場になることを望みます。

デルフォスは形も色も個性に対応出来る様になっています。

オフィスは文化のパロメーターにもなりえると思います。

畠田：ミケーレにとってデザインするという事はどういった事でしょうか

ミケーレ：デザインするということはすべての国によって意味が違います。イタリアでは線を引くとかトレースする事を意味します。プロジェクトすると言った方が適確でしょう。

私にとってプロジェクトするという事は将来の姿をイメージして精神的刺戟をする事であり、今までの自分の世界の把握を自分の好気心を持って表現する事である。具体的にはプロジェクト、インテリア、グラフィック、建築、写真、哲学等、すべてを含みすべてをやる事が私のデザインです。3月にアメリカで椅子について講演をしましたが5日間も椅子とテーブルの会議でうんざりしました。アメリカのデザイナーは一つのものに関して専門的です。ある人はフォークを一生デザインするのでフォークのデザインは大変上手です。このようなタイプをアメリカンデザイナーと私は言っています。なんでもデザインするタイプをイタリアンデザイナーと呼んでいます。とにかくテーブルの会議には2度と参加する気はありません。

畠田：一般参加者の方で何か質問はありませんか。

参加者（女性）：日本でも若い人の中にメンフィスの様な動きはあるでしょうか。

ミケーレ：倉俣氏の他にも数名メンフィスには参加してもらっています。

日本のデザインはハイテクな商品のデザイン群と店舗デザインと自動車のデザインと世界に注目されています。私が気付いたのはハイテク商品群は形も色も多彩にして行く方向にあるのに店舗デザインはブティックに見られる様に無彩色でストイックな空間構成の方向を感じました。

多分大きなシステムの違いだと思います。ハイテク群は何かを加える方に作用し、店舗は何かを取り去って行く方に作用しているその違いだと思います。

これからはポストメンフィスの様な動きが出て来て欲しいです。

私も多くのやり過ぎたり知り過ぎたりした為、既成概念を取り扱う努力が大切になっていました。

参加者（男性）：午前中桂離宮を見られたそうですが日本の古い物に対してどの様に感じておられるのか聞かせて下さい。

ミケーレ：桂は大変きれいでました。ニューヨークで桂離宮の本を買いました。桂を訪れるのが夢でした。欧米の建築も桂の影響を受けています。

将来は今日の積み重ねによってやってきます。過去の累積が今日です。だから過去を考えることが大事です。スタイルの伝統を使う必要はない。伝統の活力は続けていく所に意味があります。

今のブティックなんかは和風の感性から来ている様に思えます。テクニックが変わってもイメージにそれを感じます。材料が変わってもそのデリケートさが反映している様に日本人の大切な感性を常に使って欲しいです。その感性を決して押し入れの奥に大切にしまいこんでしまわないで下さい。

アナウンス：ありがとうございました。時間となりましたので本日の講演会はこれで終了いたします。

この後閉会の挨拶で無事終了した。一般及び学内で約500人の参加があった。

ミケーレ氏はこの講演会の後大覚寺での茶会に出席された。

## おわりに

レポートの始まりの部分でモダニズムについて少し触れたが今までモダニズムの中でこそポストモダンがハイライトを浴びられる時間だった様な気がする。(例えばピンクやブルーのポストモダンカラーが社会に存在して心地良い比率があるだろう)

ミケーレ氏の講演から感じた事は人と人のコミュニケーションの大事さと余裕ある時間の使い方である。ポストモダンが夜会服を脱ぎすぎて仕事着に着がえる時にラジカルデザインやアルキミアの真価が問われるし発揮も出来ると思う。消費形態論としては彼等の方が日本に寄って来ている。彼等と楽しく付き合う為に我々も余裕ある時間(教育)を作らなくてはならない。

企業でも学校でも若い人の教育が大事である。教育内容は民主的で大胆な発想の切り換えが必要である。教育と言う言葉 자체適切でないかも知れない。

彼等がラジカルデザインと言う言葉を作った様に適切な概念言語を作らなくてはならぬ

い。ポストモダンの行方も新しいムーブメントもどの様に展開するのか予想は出来ないが  
我々が新しい服を着て出て行く番である。

この様な講演会が開け大成功に終わった事を大変喜んでいます。今後も新しい刺激を与え  
新しい活力を生む企画をして行く事が我々の使命だと思います。

講演会に協力して頂いた、京都市、NHK、学研、参加者に感謝しレポートを閉じます。